

市 原 市 ^{いち} ^{はら} 市 原 城 郭 跡

1 9 9 8

有 限 会 社 と り せ ん 商 事
財団法人 市原市文化財センター

序 文

埋蔵文化財は、歴史資料としてはもとより、年令各層にわたる生涯学習の場と機会を提供する貴重な資料として注目されており、近年これらの環境整備が計られております。

市原市は埋蔵文化財の豊庫と言われておりますように遺跡が数多く存在し、発掘調査は市内の随所で見受けられていることと思います。特に未調査が多い中近世の城館跡は110ヶ所を数えております。

今回の調査は、このうちの1つで「市原城郭跡」と認められる中世の城郭として緊急発掘を行ったものであります。この「市原城郭跡」の周辺は、上総国分寺跡や国府推定地となる遺跡が存在し、歴史の縮図とも言える埋蔵文化財の要衝の地であります。

今回の調査地点は調査範囲がわずかの面積でありましたが、調査結果が示しますように、当城郭跡の調査の端緒となると共に、今後の調査に大いに期待が寄せられるものであります。

本報告書は、これらの成果をまとめたもので、市原の歴史や城郭の研究などの資料として、市民の皆様に少しでも役に立つことができれば幸いです。

最後に、調査に際しまして多大なご協力とご指導をいただきました有限会社とりせん商事の皆様、並びに千葉県教育委員会文化課及び市原市教育委員会ふるさと文化課の方々に深く感謝の意を表します。

平成10年9月25日

財団法人 市原市文化財センター
理事長 小 茶 文 夫

例 言

1. 本書は、千葉縣市原市市原における土地造成に先行して実施した埋蔵文化財調査の報告書である。
2. 遺跡は、「市原城郭跡」と呼称し、今回の調査地は、千葉縣市原市市原字作ノ内95-1、95-3、95-4番地に所在する。
3. 発掘調査は、有限会社とりせん商事の委託により、千葉県教育委員会と市原市教育委員会の指導のもとに財団法人市原市文化財センターが実施した。
4. 調査対象面積は、887㎡である。
5. 現地発掘調査と整理作業及び報告書刊行は次のように行った。
現地発掘調査（確認、本調査）平成9年9月18日～同年10月3日 担当者 田中清美
整理作業、報告書刊行 平成9年10月4日～平成10年9月30日 担当者 田中清美
当報告書の執筆編集は、田中清美が行った。また、出土した土師器・須恵器の一部については、高橋康男氏、縄張図の一部については田所真氏、石造物については櫻井敦史氏のご教示を得ている。
6. 調査した記録類（図面・写真）と出土遺物は、市原市埋蔵文化財調査センターで保管している。
7. 今回の調査コード（市原市文化財センター）は、「セ254」である。

凡 例

1. 本書に使用した地形図（第2、4図）は、昭和55年作成の市原市地形図1/2,500 C-6、D-6を使用した。
2. 土塁周辺の地形図は、現地にて1/200で作成した図を基に使用している。
3. 方位及びグリッドは、座標北及び国家座標を使用した。
4. 本書に示した遺構図は、現地で1/10～1/40で実測した図を基に掲載した。
5. 本書に示した遺物実測図は、原寸～1/6で掲載した。
6. 土層図中のKは攪乱層を示す。

調査組織（財団法人 市原市文化財センター）

平成9年度

役 員

理事長 白鳥 一 夫（専任）
副理事長 鳥海 清 宏（市原市教育委員会生涯学習部長）
常務理事 山口 節（専任）
理 事 大野 皎（市原市教育委員会教育長）
理 事 加藤 晋 平（國學院大学教授）
理 事 寺村 光 晴（和洋女子大学名誉教授）
理 事 木村 千 春（郷土史家）
理 事 鶴澤 綱 夫（市原市企画部長）
理 事 田中 信 雄（市原市総務部長）
理 事 大町 裕 之（市原市都市計画部長）
監 事 高山 美 則（市原市出納室長）
監 事 鈴木 利 昭（市原市教育委員会教育総務部総務課長）

職 員

庶務課

庶務課長 宮崎 澄 夫
主 事 高浦 貞 子
主 事 阿部 茂 之
事 務 員 常澄 智 子

調査一課

調査一課長 栗田 則 久
副 主 幹 峰屋 孝 之
主 査 田中 清 美
係 長 小出 紳 夫
副 主 査 近藤 敏
副 主 査 高橋 康 男
副 主 査 田所 真
調査研究員 小川 浩 一
調査研究員 北見 一 弘
調査研究員 鶴岡 英 一
調査研究員 小橋 健 司
調査研究員 牧野 光 隆
主 事 大鐘 光 江
事 務 員 辻 葉 子

調査二課

調査二課長 宮本 敬 一
副 主 査 大村 直
主任調査研究員 忍澤 成 視
調査研究員 半田 堅 三

平成10年度

理事長 小茶 文 夫（市原市教育委員会生涯学習部副参事）
副理事長 杉田 昭（市原市教育委員会生涯学習部長）
常務理事 山口 節（専任）
理 事 大野 皎（市原市教育委員会教育長）
理 事 加藤 晋 平（國學院大学教授）
理 事 寺村 光 晴（和洋女子大学名誉教授）
理 事 木村 千 春（郷土史家）
理 事 鶴澤 綱 夫（市原市企画部長）
理 事 河野 徳 三（市原市総務部長）
理 事 大町 裕 之（市原市都市計画部長）
監 事 高山 美 則（市原市出納室長）
監 事 武内 邦 夫（市原市教育委員会教育総務部総務課長）

職 員

庶務課

庶務課長 宮崎 澄 夫
主 事 高浦 貞 子
主 事 阿部 茂 之
事 務 員 常澄 智 子

調査一課

調査一課長 栗田 則 久
課長補佐 峰屋 孝 之
主 査 田中 清 美
係 長 小出 紳 夫
副 主 査 近藤 敏
副 主 査 高橋 康 男
副 主 査 田所 真
調査研究員 小川 浩 一
調査研究員 北見 一 弘
調査研究員 鶴岡 英 一
調査研究員 牧野 光 隆
調査研究員 小橋 健 司
主 事 大鐘 光 江
事 務 員 辻 葉 子

調査二課

調査二課長 宮本 敬 一
副 主 査 浅利 幸 一
主任調査研究員 忍澤 成 視
調査研究員 半田 堅 三

目 次

本文目次

序 文

例言・凡例

調査組織

目 次

1. 調査に至る経緯	1
2. 遺跡の位置と環境	1
3. 調査状況	5
4. 検出した遺構と遺物	5
5. 市原城郭跡の縄張りについて	6
6. まとめ	16

抄 録

挿図目次

第1図 遺跡の位置図	2
第2図 周辺地形図	3
第3図 周辺の関連遺跡等	4
第4図 市原城郭跡縄張図	8
第5図 土塁周辺の地形図	9
第6図 調査全体図	10
第7図 郭内トレンチ全体図	11
第8図 土層セクション実測図	12
第9図 1号、2号土壌実測図	13
第10図 出土遺物実測図(1)	14
第11図 出土遺物実測図(2)	15

写真図版目次

写真図版	19
図版1	20
図版2	21
図版3	22
図版4	23
図版5	24
図版6	25
図版7 (遺物)	26
図版8 (遺物)	27
図版9 (航空写真)	28

表 目 次

第1表 出土瓦観察表	7
第2表 出土五輪塔各部計測表	7

1. 調査に至る経緯

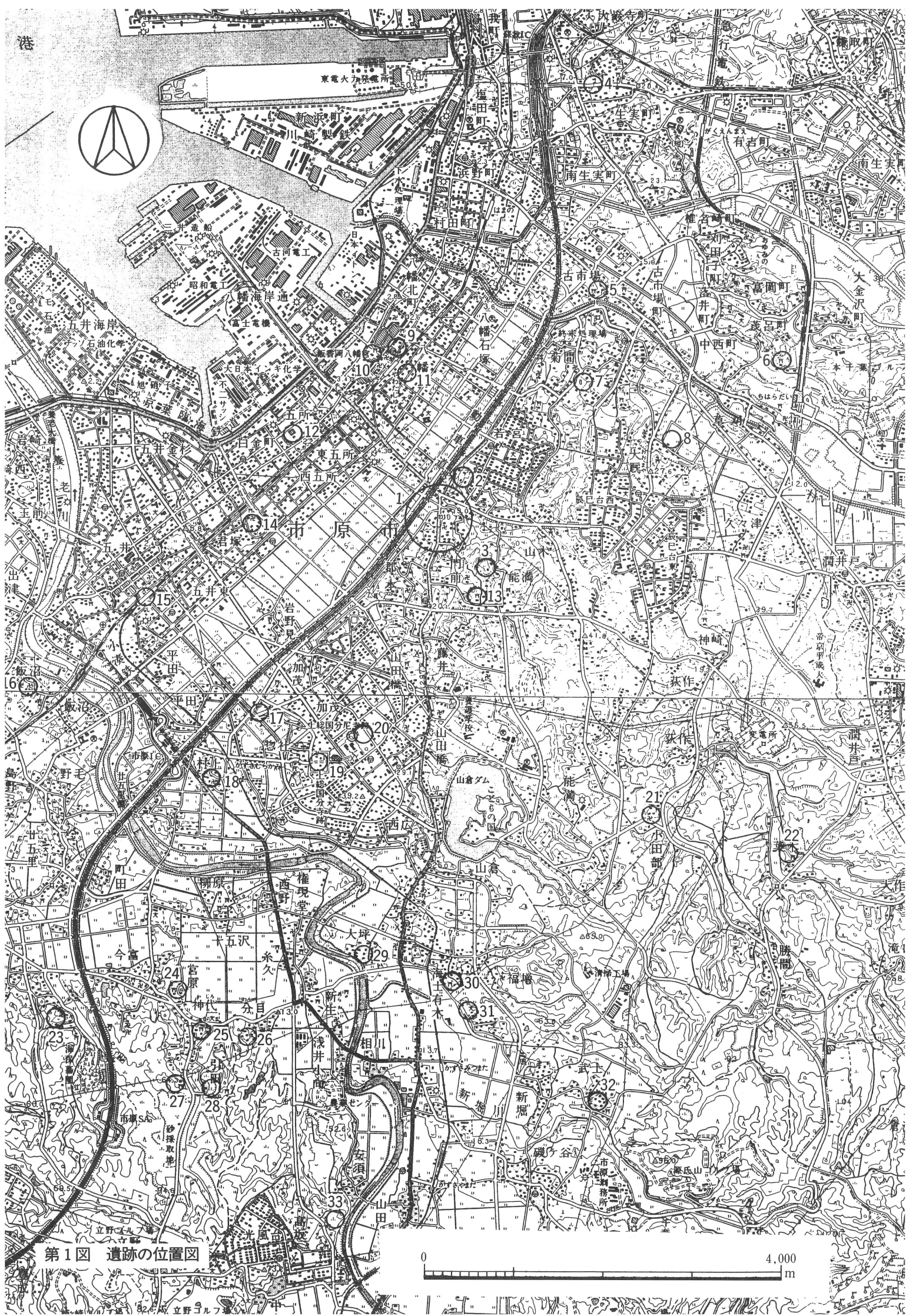
平成9年6月13日付けで有限会社とりせん商事代表取締役木口靖子は、市原市市原字作ノ内95-1、-3、-4番地の土地造成を計画し「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会を千葉県教育委員会と市原市教育委員会に提出した。それを受けての現地踏査などにより平成9年7月1日付けで「中世城郭跡1ヶ所」の回答がなされた。その後三者による度重なる協議がなされ、土塁及びその周辺は記録保存、他は土盛保存とする方針が確定した。発掘調査は、財団法人市原市文化財センターの受託事業として平成9年9月18日より同年10月3日まで実施した。

2. 遺跡の位置と環境

市原城郭跡は、東京湾東岸の旧汀線より砂堆と後背低地を挟んで1km東方の洪積台地上に位置する。付近の台地は、通称『市原台地』と呼ばれ、標高10~40mで、小谷によって切られ樹枝状に台地が刻まれた形態を呈している。当城郭は、北東方向を向く標高20m前後の舌状台地端部に立地する。

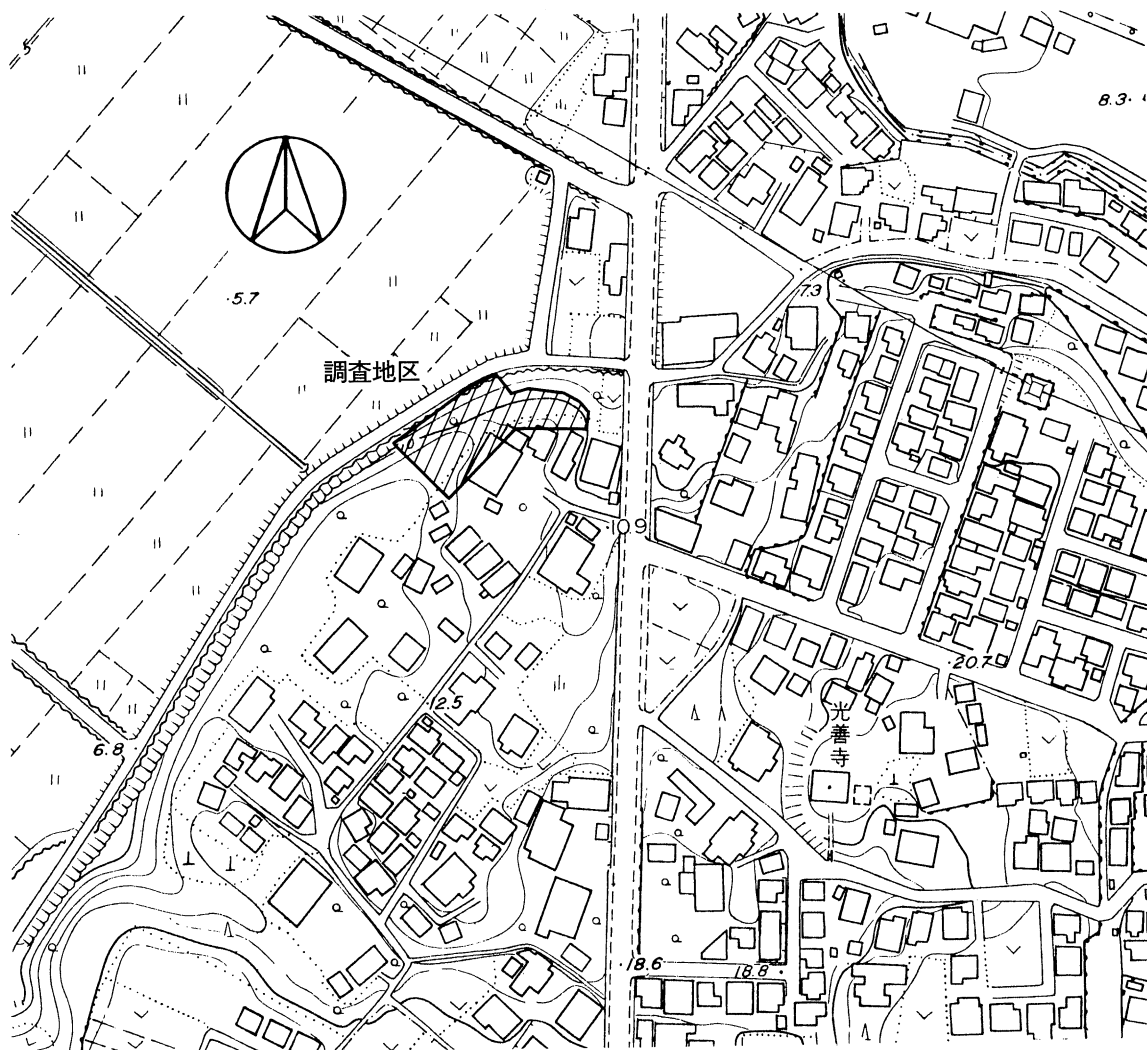
当城郭の郭内には凸面布目の桶巻作りとみられる瓦や上総国分寺跡と同様の軒瓦を検出し、古代市原郡の定額寺といわれる光善寺廃寺跡^{註1}、台地南側には上総国府推定地の古甲遺跡^{註2}など、南側から小字辻を通して西側の低地に向う幅6mの古代道跡^{註3}、万葉集にも歌われたと考えられる阿須波神社^{註4}は城郭内の南西側の古代道脇に所在する。また、飯香岡八幡宮の秋季大祭の祭儀や神輿の渡却の開始を告げる柳楯神事^{註5}は、柳楯を城郭内の市原地区集落内で調達し、南側の市原八幡宮から阿須波神社を参り、古代道上を通して五所地区集落方面に向かうルートで運ばれる。更に、15世紀~16世紀にかけての時期と判明した白船城郭跡^{註6}は、北側小谷を挟んで対岸に存在し、中世上総国の国衙と考えられている能満城郭跡^{註7}は小谷を挟んで南東側の台地上に位置している。また、真里谷武田氏に擁立され小弓城主となる足利義明の館である霊応寺や八幡御所跡推定地が西側の東京湾岸砂堆上に存在する。この他に西側低地上に存在する君塚城郭跡、岩野見城郭跡、西野谷の集落、南側台地の養老川を望む西南端部に造られた根田城郭跡なども市原城郭跡との関連性が想定できる。台地南側の宮前遺跡^{註8}や台遺跡^{註9}は、中世の墓域とみられ発掘調査が実施されている。また、飯香岡八幡宮は上総国総社であり本殿は室町中期^{註10}、能満城郭内にある府中日吉神社は本殿が室町初期の建造物である^{註11}。南側500mの多聞寺には南北朝末期^{註12}の五輪塔が存在する。

城郭跡の調査のため中世の歴史的背景を簡単に追ってみる。当地は鎌倉時代後期には市原荘として成立していたとみられ^{註13}、この時期には北条氏の勢力範囲であった。南北朝期頃には上総国の守護職でもあった足利氏の庇護下で醍醐寺勢力が進出してくる^{註14}。15世紀後半には武田氏が進出し、16世紀初めには古河公方足利政氏の子足利義明を小弓城に擁立した。しかし、天文7年(1538年)の第1次国府台合戦で北条氏に敗れ、その後武田氏が衰退、里見氏が進出してくるが、永禄7年(1564年)に再び国府台で敗れ北条氏に制圧される。天正18年(1590年)には秀吉の支配下にあった様で、家康の関東入国後は徳川氏が直轄地を関東周辺に集中させる政策により、房総の城郭は一部を除いて廃城となった^{註15}。



第1図 遺跡の位置図

0 4,000 m



第2図 周辺地形図



第1図番号説明

- | | |
|--|---|
| 1. 市原城郭跡 (伝) 天文23年(1554) 忍丹波守と弟の丁民部少輔が居城 | 18. 村上城郭跡 (伝) 村上民部大輔、村上大蔵大輔義芳が居城、昭和59年(1984) 一部調査 |
| 2. 白船城郭跡 (伝) 市原備前守真常が居城。15世紀末～16世紀初頭 | 19. 上総国分僧寺跡 |
| 3. 能満城郭跡 中世国衙に推定されている。 | 20. 上総国分尼寺跡 |
| 4. 小弓城郭跡 (伝) 原氏、足利義明など居城 | 21. 小田部館跡 |
| 5. 菊間館跡 千葉氏の臣・高橋恒重の居館か。 | 22. 葉木城郭跡 |
| 6. 草刈城郭跡 昭和55年(1985) 県センター調査 | 23. 海保城郭跡 (伝) 海上与市常衛(承久元年1219)、海上与市右衛門尉賢胤(1429～1444)が居城 |
| 7. 菊間藩庁跡 水野忠敬 1867～1870 | 24. 宮原御所跡 (伝) 足利左馬頭晴直(山ノ内上杉憲寛) 享禄4年(1531) |
| 8. 大厩館跡 昭和53年消滅 | 25. 神代城郭跡 |
| 9. 八幡陣屋跡(推定地) 堀直良 寛文8年(1668)、元禄11年(1698) 廃止 | 26. 分目要害城郭跡 平成5年(1993) 一部調査 |
| 10. 飯香岡八幡宮 上総国総社 | 27. 引田城郭跡 |
| 11. 霊応寺跡(伝) 飯香岡八幡宮の別当寺 | 28. 万台城郭跡 昭和40年代に大半が消滅 |
| 12. 八幡御所跡(推定地) 足利義明、昭和56年(1981) 確認調査 | 29. 大坪城郭跡 (伝) 大坪慶秀の出身地 |
| 13. 府中吉日神社 | 30. 蟻木城郭跡 (伝) 二階堂又太郎実綱(天文)、椎津中務少輔、椎津帯刀(天正)が居城 |
| 14. 君塚城郭跡 | 31. 小野山城郭跡 (伝) 小野修理守が居城 |
| 15. 五井陣屋跡 有馬氏恕 天明元年(1781) 1万石、天保11年(1840) 廃止、(元正末 松平紀伊守家信) | 32. 武土城郭跡 |
| 16. 飯沼館跡 | 33. 安須城郭跡 |
| 17. 根田城郭跡 昭和55年(1980) 発掘調査 | |

3. 調査状況

今回の調査は、土塁周辺の887㎡の範囲であり、土塁については1/200の縮尺（20cmコンター）で地形図を作成し、その土塁及び周辺にトレンチを任意に設定した。その結果、土塁上面は全面的に拡張し、他の部分についてはトレンチ調査のみ（8本）であった。実測の基準点は座標軸を用い、水準点は海拔を利用した。遺構の図面は1/10～1/40縮尺で作成し、写真は35ミリとブローニー版の白黒とカラースライドで記録した。

4. 検出した遺構と遺物

（1）土塁。土塁は郭部分を囲むように西側から北側にかけて存在する。土塁のほぼ中央部やや低くなった部分（西側から北東方向に曲がる部分）は後世に切断されている。切断した土砂は北側低地方向に押し流し、低地に降りられる様に小道をつくっている。またこの切断部分はその後にゴミ捨て場としても利用されている。本項ではこの切断された部分の西側を西側土塁、北側から東側を北側土塁として説明する。西側土塁は長さ20m（上部長さ14m）、最大幅5.60m、頂部の高さ17.88m、北側土塁は長さ26m（同14m）、最大幅3.80m、頂部の高さ15.95m、各々の土塁の郭からの比高は4～6m、西側低地からの比高は10m前後を測る、両土塁とも西側部分の頂部が高く東側が低い2段となっており1～2mの段差がある。また内側（郭内）は曲折がみられる。しかし西側土塁の曲折は後世に宅地として郭内が利用されたためその掘削による変形と考えられる。土塁は盛土が確認できず、表土もソフトロームやハードロームが崩壊した土層であり、北側土塁の東端部では下末吉粘土層が露出していた。したがってこれらの土塁は台地を削り出して造られ、余剰土は郭造成に利用されたとみられる。土塁は北東端で無くなるが以前は郭東側も存在していたと伝えられている。また、南側は規模が小さくなるが続いており、古木の切株が存在することなどから郭の四方を囲む形で存在していたと推定される。北東端の途切れた部分は北側からの虎口の可能性もある。また、南西部分（調査地区外）では縦堀り状の施設（虎口にも利用？）が残存している。

（2）土塁上の土壇。西側土塁上に人骨を伴う2基の土壇が存在する。1号土壇は南側に位置し、土塁の最高地点付近に所在する。平面形体は胴張りの長方形と考えられ、検出した規模は上端長軸1.73m、短軸1.36m、深さ8cmである。長軸方向はN-40°-Wを示す。人骨は1体分とみられ、下顎骨（歯を含む）と上腕骨及び大腿骨片とみられる部分が出土し、状況から頭を北に向けた屈葬と考えられる。副葬品は出土していない。2号土壇は西側土塁の中央付近でやや南側縁辺部に所在し、1号土壇から約8m北東に離れている。平面形体は胴張りの不整長方形で長軸1.70m、短軸1.56m、深さは31cmを測る。長軸方向はE-9°-Nを示す。西側にはやや浅い円形の落ち込みがあり2段（段差5cm）の立ち上がりを示す。調査は大木の切株が存在し、傾斜地のため困難を極めたが、現地調査で少なくとも15体以上の頭骸骨を確認した。残存状況は不良で細かい破片の状態で出土した。検出状況からは埋葬方向など規則性はなく、投げ込まれた様な状況と判断している。副葬品はない。また、五輪塔の火輪と水輪が流れ込んだ形で出土している。

（3）郭内。郭は既に宅地として利用されており、かなり後世の攪乱が予想された。今回の調査は基本的には土塁周辺のみであり、土塁に直行するように8本のトレンチを設定した。検出した遺構は、

1号トレンチより土坑2基、3号トレンチより炭窯1基、6号トレンチより土坑3基などであるがいずれも近世以降の所産である。また、4～7号トレンチ南から東側では深い掘り込みが認められ（最大70cm）、これらは同一遺構と考えられる。さらに土塁と平行するように巡る溝が存在する（2、5、6、7号トレンチ）。大きさは最大幅1.20m、深さ最大18cmである。この溝は土層観察より郭内では最も古い遺構とみられるが時期は不明である。7号トレンチのこの溝を切っている土坑底部からは宝永の火山灰が検出されている。

（4）五輪塔（第10図18～23、第11図1～3）。五輪塔片が土塁上4点、土塁裾周辺5点の9点出土している。やや色調の差はあるがいずれも安山岩で伊豆石と言われる石材とみられる。^{註16} 時期や各寸法等については第2表を参照。

（5）その他の出土遺物（第10・11図）

1. 土師器杯。7号トレンチより出土。口径13cm、器高4.6cm、碗状を呈する。口縁部は両面とも横ナデ、体部は外面が横方向のヘラケズリ（擦過痕多し）、内面は横方向のヘラナデ、焼成は普通、胎土に鉄分粒を少量含む。色調は赤褐色、淡褐色、暗褐色で両面に赤彩が残る。体下部は少し摩耗している。約60%の残存。
 2. 土師器杯。北側土塁上より出土。平底で器高は低く皿状を呈する。約1/6の残存。口径14.7cm、底径7.0cm、器高2.45cm（いずれも推定）。底部はヘラナデ、体下部はヘラ横ケズリ、成形は回転具を用いている。色調は淡褐色、一部褐色、焼成は少し不良、胎土は緻密。
 3. 土師器杯。北側土塁上出土。底部付近の破片で約1/4の残存。底部は回転ヘラケズリ、体下部も横方向のヘラケズリ、底部切り離しは糸切りとみられる。糸痕が体下部に残る。底径は6.7cm（推定）。色調は褐色、焼成は不良、胎土は緻密。
 4. 土師器杯。1号トレンチ出土。底部付近の破片で約1/2の残存。底部は右回転ロクロ糸切り離し、底径は5.8cm（推定）。色調は淡暗褐色、黒淡褐色、焼成は少し不良。胎土は緻密、わずかに金雲母を含む、摩耗有り、内側は黒色処理の可能性がある。
 5. 須恵器甕片。西側土塁上出土。外面にはタタキ目、内面はナデ、両面とも黒灰色。焼成はやや不良。胎土は緻密。
 - 6～9. 須恵器甕片。いわゆる充分な環元炎焼成を成されていない須恵器である。^{註17} 外面はタタキ目、内面はナデが認められる。器厚5.0～8.5mm、色調は外面が黒色、内面淡灰黒色、焼成はやや不良。胎土は1mm大の小礫を少量含むが比較的緻密である。同一個体の可能性がある。1トレンチ出土。
 - 10～17. 布目瓦。第1表参照。10は凸面布目瓦である。
- 第11図4. 5. 寛永通寶。4は古寛永、5は新寛永である。4は6号トレンチ5号土坑、5は5号トレンチ出土。

5. 市原城郭跡の縄張りについて（第4図）

市原城郭跡はかなりの範囲にわたり宅地造成が進み保存状況は大変悪いがここでは現存する土塁などの地形から縄張りを考えてみたい。市原城の範囲は、北側方向を向く舌状台地の先端部（小字橋本）から南側の東西から小谷が入り込む部分（小字シダレ、人市場、寺山）までとみられる。大手口は北側の小字橋本付近と考えられ、ここには自然の谷（幅50m）が北東から南西方向に入る（小字作ノ内）。

第 1 表 出土瓦観察表

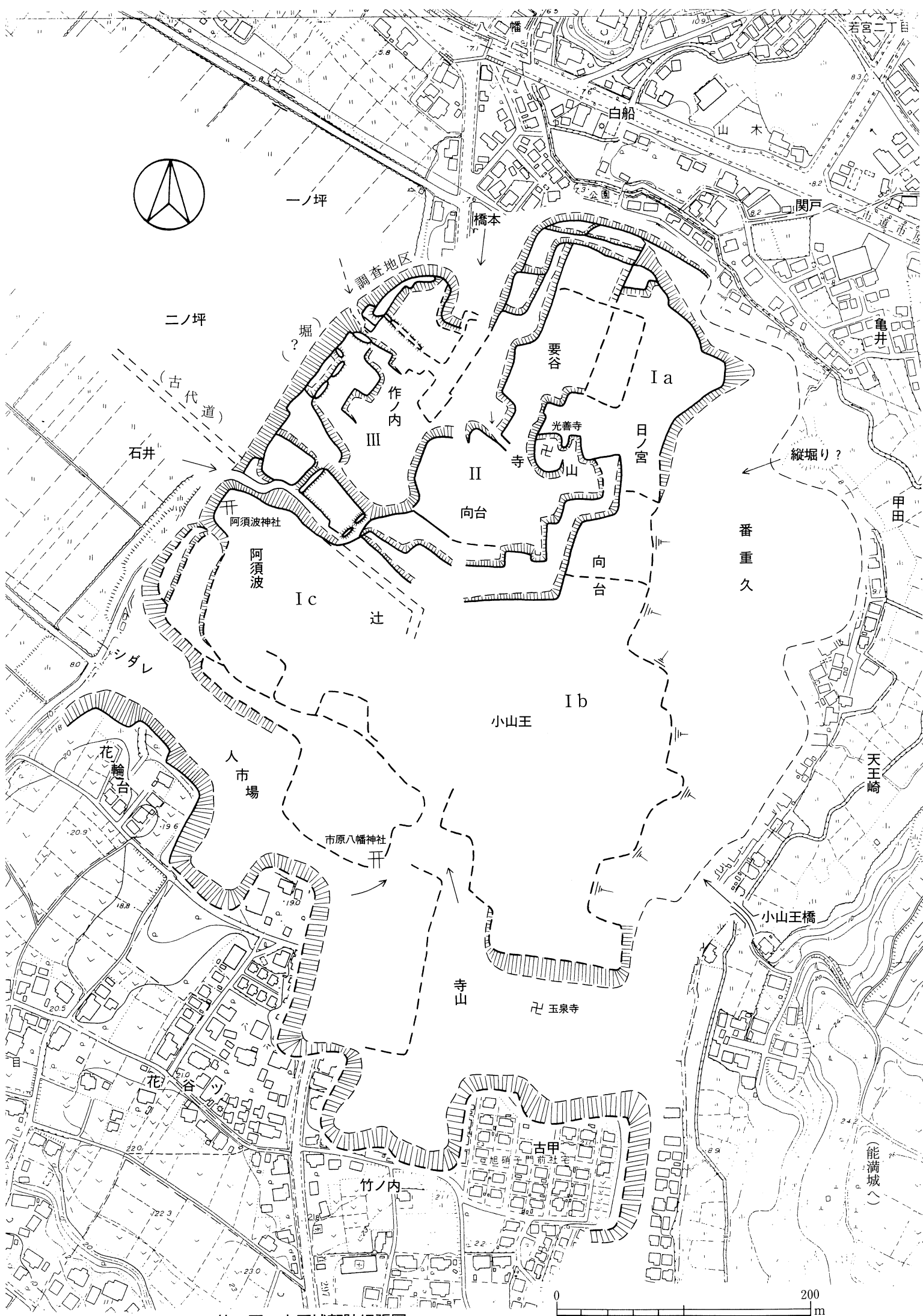
挿図番号	種 別	出土位置 残存状況	度員 (cm)	胎 土	焼 成	色 調	器形・技法等の特徴
第10図10	女 瓦	東側土壘上 破 片	厚さ 2.2	緻密	酸化焰 少し不良	淡褐色と 黒褐色	凹面は横方向のヘラナデ、凸面は布目
第10図11	女 瓦	東側土壘上 破 片	厚さ 2.0	〃	酸化焰 少し不良	暗褐色	凹面は縄目、凸面は横方向のヘラナデ
第10図12	女 瓦	西側土壘上 破 片	厚さ 1.9	〃	酸化焰 やや不良	淡褐色	凹面は布目 凸面は縄目 面取りは3面
第10図13	女 瓦	東側土壘上 破 片	厚さ 2.4	〃	酸化焰 不 良	淡褐色	凹面は布目 凸面はヘラナデ
第10図14	女 瓦	東側土壘上 破 片	厚さ 2.8	〃	酸化焰 少し不良	淡褐色と 褐色	凹面は布目 凸面は縄目
第10図15	女 瓦	東側土壘上 破 片	厚さ 1.7	〃	酸化焰 やや不良	褐 色	凹面は布目 凸面は横方向のヘラナデ
第10図16	女 瓦	東側土壘上 破 片	厚さ 2.1	〃	還元焰 少し不良	灰褐色	凹面は布目 凸面は縄目
第10図17	女 瓦	西側土壘上 破 片	厚さ 2.1	〃	酸化焰 少し不良	淡褐色	凹面は布目 凸面はヘラナデ

第 2 表 出土五輪塔 各部計測表

数字の () は推定

挿図 番号	名 称	出土位置	高さ (cm)	幅 (cm)	奥行き (cm)	空輪高 (cm)	風輪高 (cm)	幅：高さ	空輪高：風輪高	幅：奥行き	重量 (kg)	備 考
10-18	空風輪	西側土壘上	19.7	11.6	11.8	10.5	9.2	1：1.70	1：0.88	1：1.02	2.32	淡褐灰色
挿図 番号	名 称	出土位置	高さ (cm)	幅 (cm)	奥行き (cm)	軒中央 (cm)	軒先 (cm)	幅：高さ	軒中央：軒先		重量 (kg)	
10-19	火 輪	西側土壘上 2号土坑内	11.8	21.0	20.6	3.1	3.6	1：0.56	1：1.16		7.33	淡褐灰色
10-20	〃	表採	12.8	19.3	18.5	3.5	(5.7)	1：0.66	1：1.63		5.98	暗褐灰色
挿図 番号	名 称	出土位置	高さ (cm)	幅 (cm)	奥行き (cm)	A (cm)	B (cm)	幅：高さ	A：B	幅：奥行き	重量 (kg)	
10-21	水 輪	西側土壘上 2号土坑内	12.3	18.2	18.7	5.3	7.1	1：0.68	1：1.34	1：1.03	6.08	淡褐灰色
10-22	〃	8トレンチ	12.1	19.9	19.4	6.0	5.9	1：0.61	1：0.98	1：0.97	5.99	淡褐灰色
挿図 番号	名 称	出土位置	高さ (cm)	幅 (cm)	奥行き (cm)			幅：高さ		幅：奥行き		
10-23	地 輪	西側土壘上 土坑付近	12.1	17.2	17.1			1：0.70		1：0.99	8.02	淡褐灰色
11-1	〃	8トレンチ	12.7	18.7	17.5			1：0.68		1：0.94	8.32	側面削られる。 淡褐灰色
11-2	〃	表採	11.7	18.5	17.7			1：0.63		1：0.96	8.34	側面丸い。 淡褐灰色
11-3	〃	表採	13.8	18.2	18.2			1：0.76		1：1	7.30	凹凸有り。 暗褐灰色

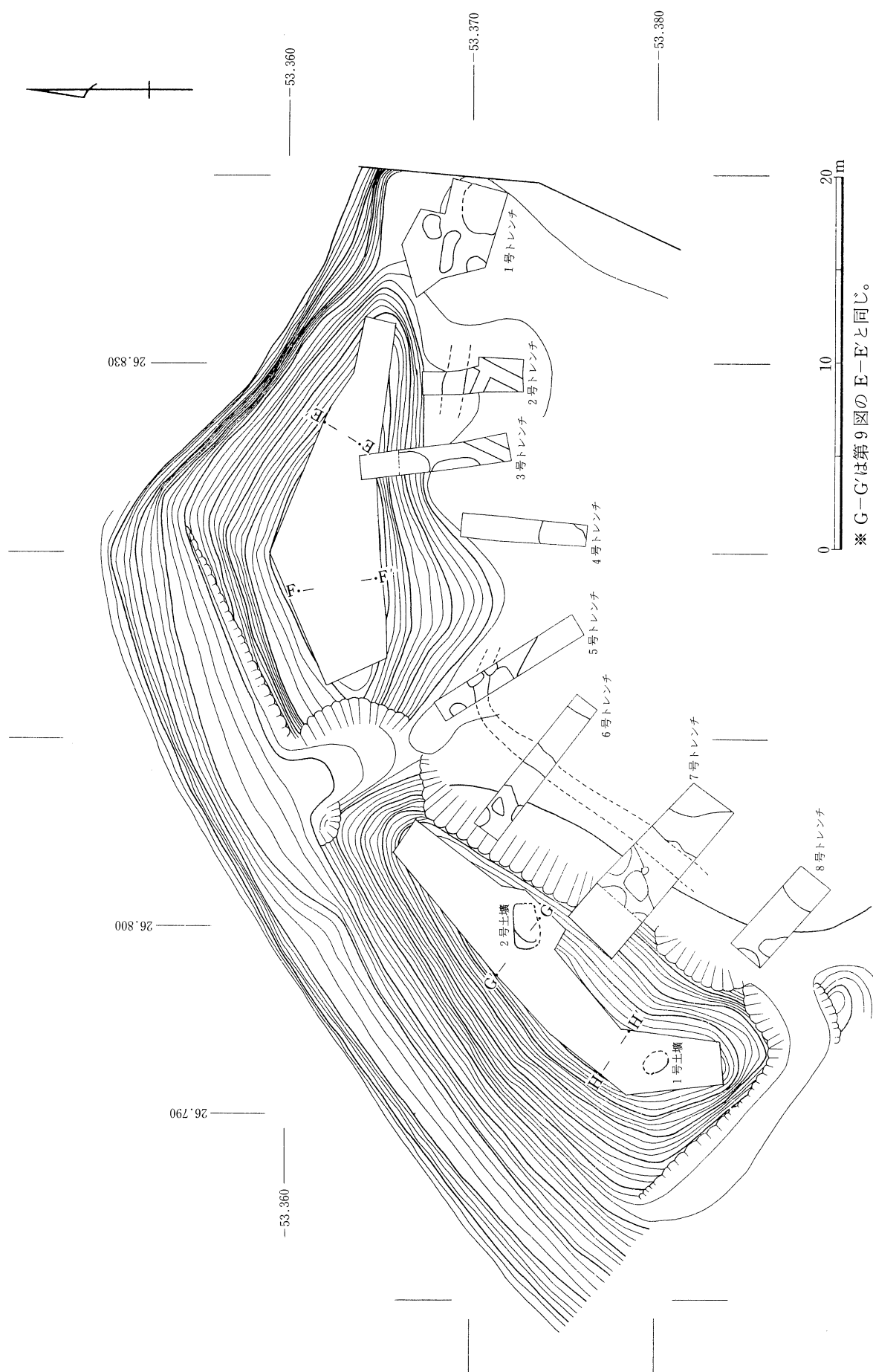
※水輪のAとBは中央の最大幅より上の高さ(A)、下の高さ(B)



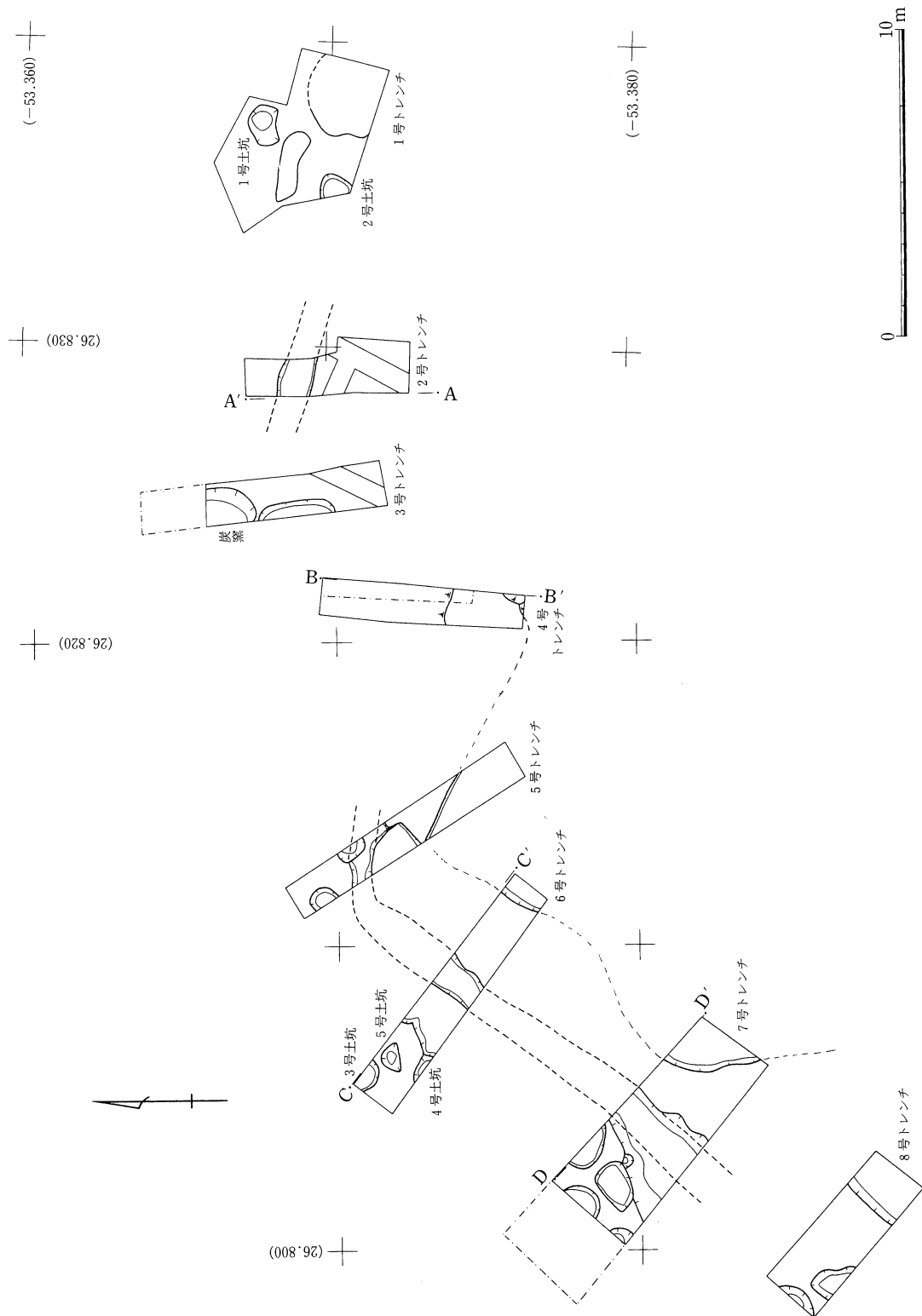
第4図 市原城郭跡縄張図



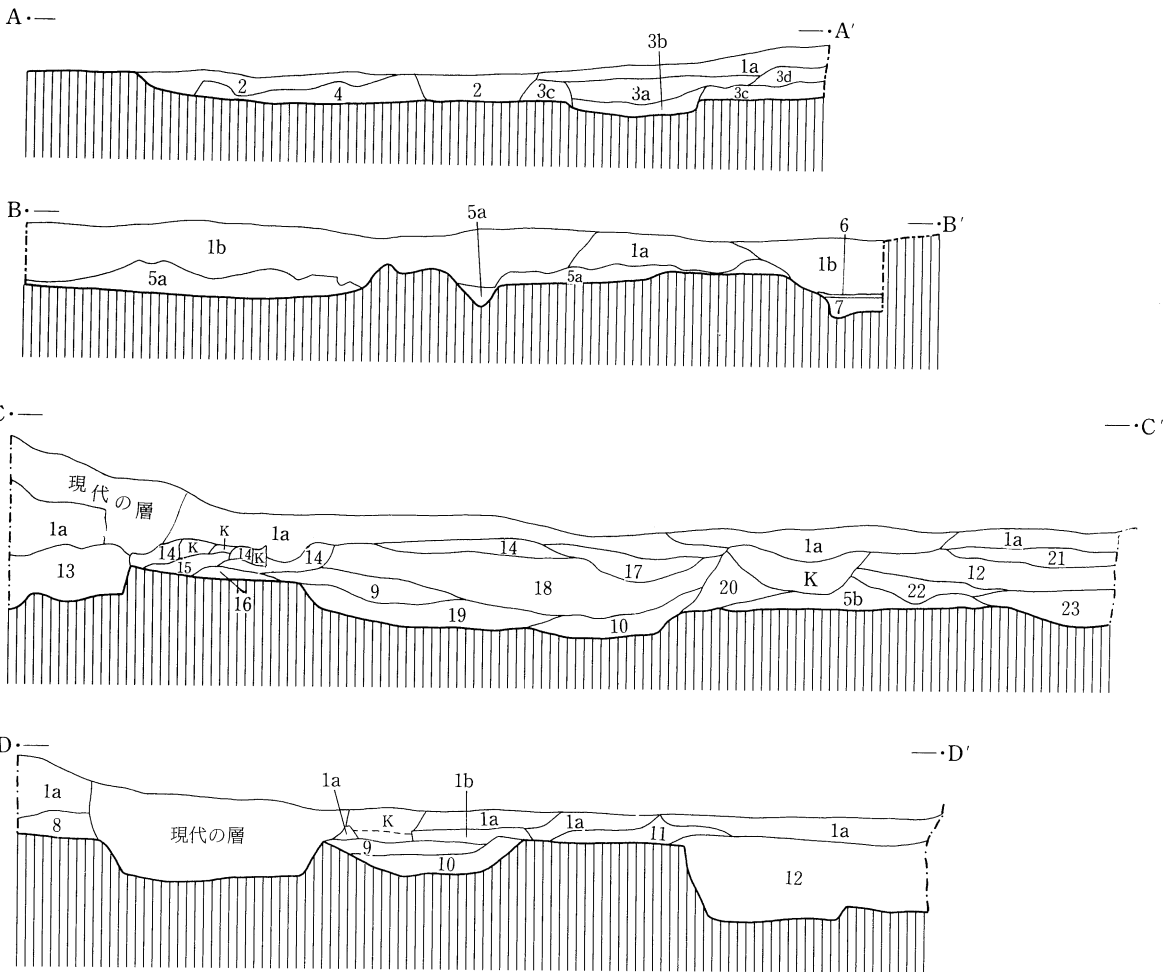
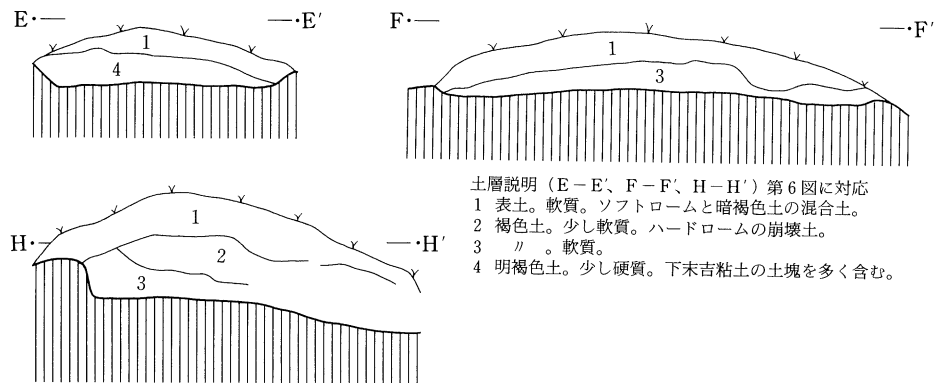
第5図 土塁周辺の地形図



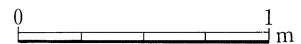
第6図 調査全体図

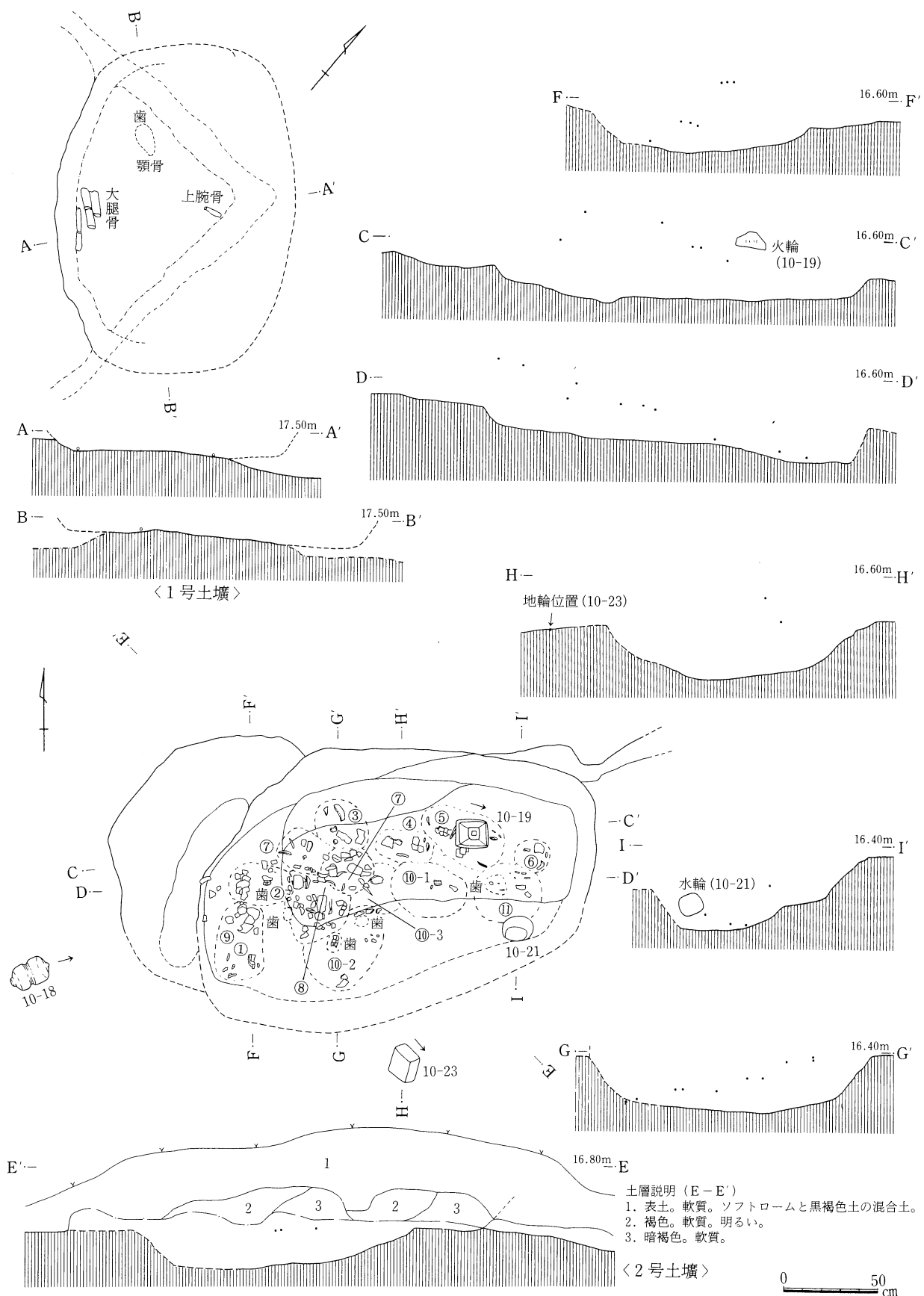


第7図 郭内トレンチ全体図

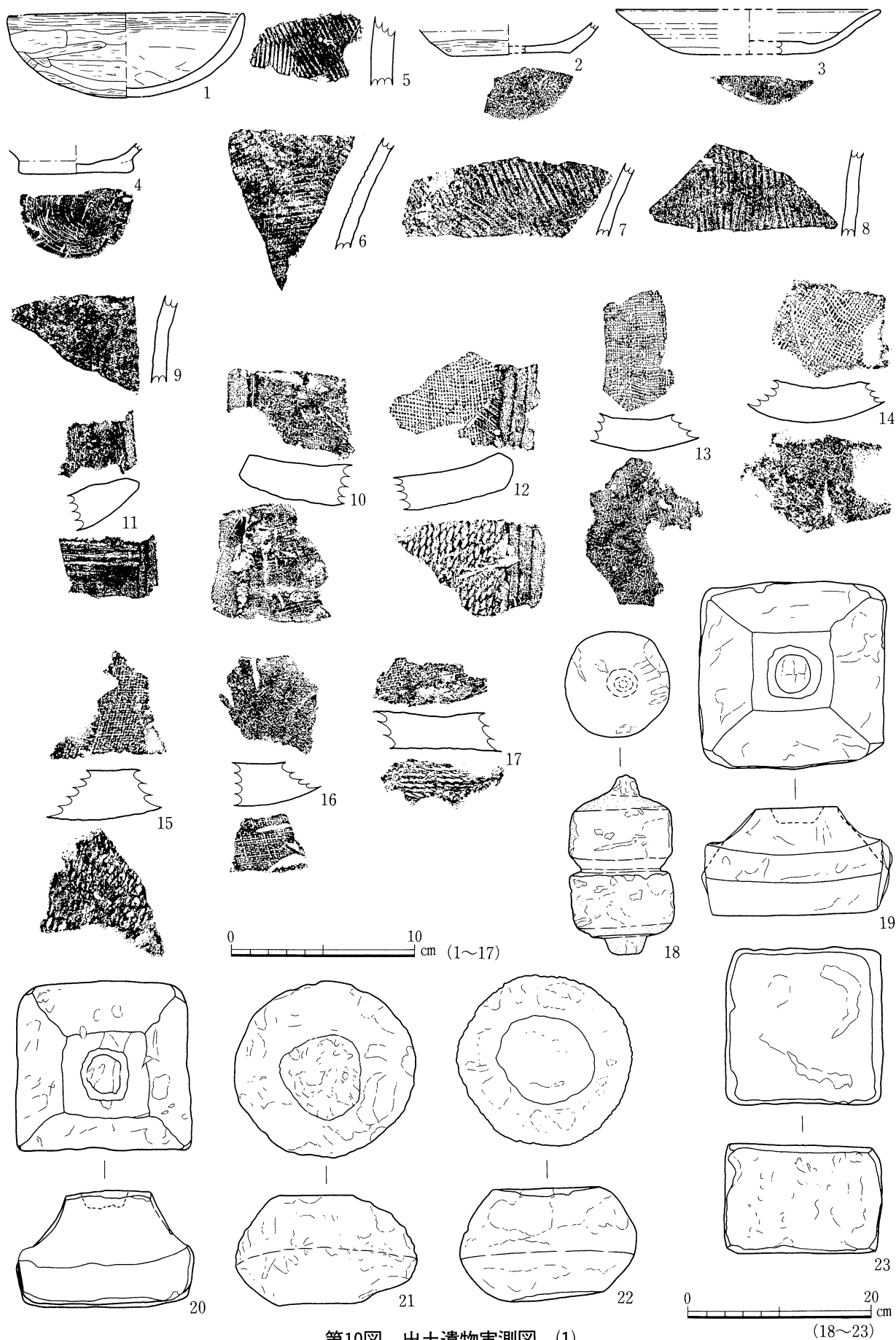


第8図 土層セクション実測図

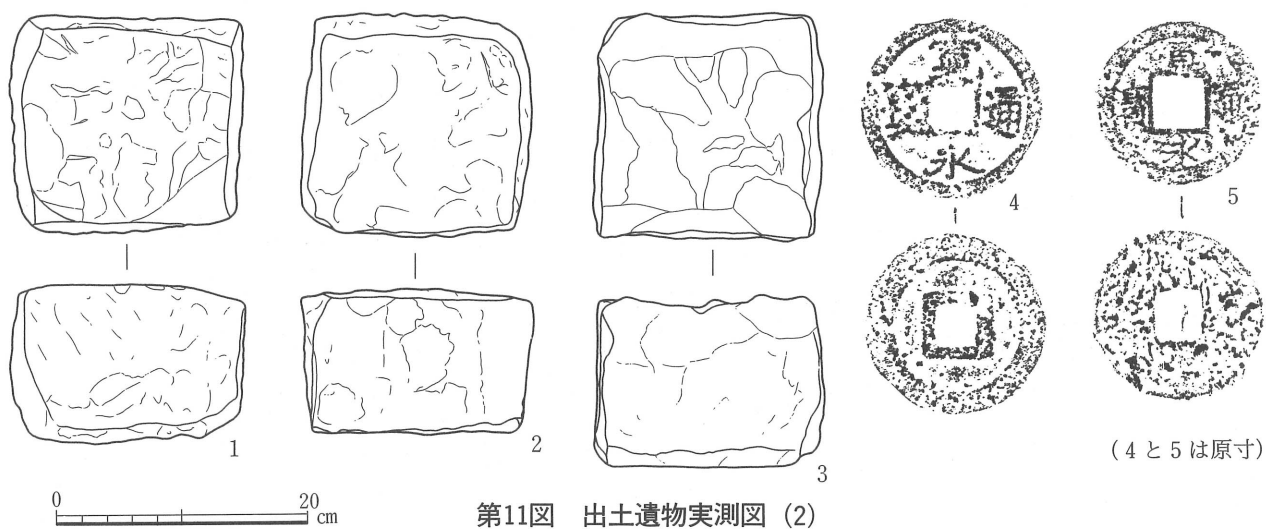




第9図 1号、2号土壌実測図 ※断面図中の点は主な骨の出土位置
E-E'は第6図の G-G'と同じ。
丸数字は人骨の現地取り上げ番号



第10图 出土遺物実測図 (1)



第11図 出土遺物実測図 (2)



北側土塁の調査状況



西側土塁付近の調査状況

この谷の両斜面は多くの郭が残存し、当初は複雑な形体を呈していたことが伺える。谷の西側は幅50mくらいの平坦面をもつ小さな尾根状の台地で、郭や土塁が残存する。西側低地と郭との比高は約6mであり、低地には堀の存在の可能性がある。今回調査した地区はその北東側端部にあたる。また南側には西側からの虎口が存在する(小字阿須波)。ここは古代道の所在する場所でもあり虎口南側端部^{註18}には阿須波神社が鎮座する。谷の東側台地は西側台地の2倍以上の平面規模をもち(小字要谷)、谷から上部に向って郭が多く残存する。谷の東側中央部付近には井戸があり、その東側は虎口が残り奥には光善寺廃寺跡が存在する(小字寺山)。東側の最高地点は小字日ノ宮付近で現在は宅地造成によって削平され遺構は残存しない。しかし台地北東端には送電線の鉄塔が有り、この付近だけ高く残っており、櫓台などの可能性がある。この付近と北側から東側の谷部分(小字関戸)との比高は約18mを測り、北側は急傾斜であるが東側ほど緩斜面となる(小字番重久の北側に東側から入る縦堀が在った可能性もある)。光善寺廃寺跡の南西側は弧状の郭が数段存在し(小字向台、寺山)、光善寺廃寺跡にも土塁の一部が残る。これら2つの台地の南側は広い平坦面が存在しているが(小字阿須波、辻、向台の一部、小山王)、宅地造成のためもあって遺構を確認できない(南西側の小字阿須波の斜面部には帯状の郭が存在する)。これらの平坦面から東側の斜面(小字番重久)^{註19}は緩らかな傾斜が続き郭などの存在は認められない。しかし、小字小山王^{註20}の南東側の谷の部分は小山王橋が有り、この道は能満城郭跡の中核^{註21}と考えられる地域に早く通じるため、連絡路または搦手口の可能性がある。南側の小字シダレ、人市場、寺山は外堀とみられ、堀中から市原八幡神社付近へ虎口が存在した可能性もある。小字シダレ、人市場は寺山より堅固な造りである。市原城の全体を大きく把えれば、小字日ノ宮、向台の一部、要谷の一部付近が最高所でⅠ郭a、要谷の一部、寺山、向台の一部がⅡ郭、作ノ内付近がⅢ郭として考えておきたい。しかし南側の外堀と間の広範な高台(小字阿須波、辻、小山王をここではⅠ郭として考え、仮にⅠb、Ⅰcとしておく。)をどう把えるかが今後の問題となる。以上のように防御的には南西側から北西側(東京湾沿いの沖積平野)を最も意識しており、北東側から南東側は緩斜面となり以前から言われている能満域などと密接な関連性を想定させる造りである。

6. まとめ

市原城郭跡の城域は、前辻5の様に北東側を向く舌状台地で南側には東西から入る谷によって外堀となって区切られている。城郭の規模は南北約600m、東西約500mとみられる。虎口は西側と北側と南側に存在し東側は防御の意識が薄い。現存する遺構の城の時期は舌状台地端部を利用して郭が複数で築造している点などから16世紀後半の遺構と考えられる。今回調査した遺構は城の北西端付近^{註22}の土塁とその周辺のわずかな範囲の調査であった。土塁は比較的規模が大きく尾根状の原地形を削り出している。盛土は認められなかった。西側の土塁上には土壌が2基存在し、いずれも保存状況が悪いが、人骨を埋葬している。1号土壌は屈葬とみられ、下顎骨(歯をもつ)、上腕骨、大腿骨などが少量出土している。1体分とみられる。2号土壌は頭蓋骨が15体以上不規則な出土状況で検出された。これは投げ込まれた可能性もある。特に関連する出土遺物は無いが覆土内より15世紀代の五輪塔の火輪と水輪が流れ込んだ状況で出土している。また2号土壌出土の人骨の頭蓋骨には刀傷とみられる痕跡が数点認められる。さらに成長過程の永久歯を上顎骨内に包まれている部分もある。出土した人骨については鑑定委託を行なう予定であるが本書では出土状況などの報告に留め、鑑定結果は後日に当センタ

- 註12 註4と同じ P45
- 註13 櫻井敦史「八幡・五所地域の中世石造物」 P80『市原市文化財センター研究紀要Ⅲ』1995 (財)市原市文化財センター
- 註14 註13と同じ
- 註15 大木衛他「概説」P41 『日本城郭大系第6巻 千葉・神奈川』1980 (財)新人物往来社
- 註16 15世紀代の所産である。
櫻井敦史氏ご教示。
- 註17 倉田義弘「4、下総産須恵器の特性と系譜」 P273『房総における歴史時代土器の研究』1987 房総歴史考古学研究会
- 註18 註3と同じ
- 註19 「番重久」は、国衙工房に付属した細工所・番匠・鍛冶に給付された免給田を示す地名と言われている。
高村隆「第2章南北朝・室町時代」『市原市史中巻』1986 市原市
- 註20 「小山王」は、日吉神社の小祠が存在し、その名で呼ばれている。
註11のP8の注5、鴛田恵吉「上総国府の研究」 P99『市原地方史研究第四号』1968 市原市教育委員会
- 註21 「主郭部は高さ2.5mの土塁と幅10mの空堀を残して虎口は西側に開けられている。」
註7の鈴木氏文中より。
- 註22 柴田龍司「中世城館の構造とその変遷—千葉県内の発掘成果を通して—」P412～414『千葉県文化財センター研究紀要16』1995 (財)千葉県文化財センター
- 註23 註4と同じP58
- 註24 註6と同じ P1、P6
- 註25 寺田廣他「市原市史資料集(中世編)」P253、287、1980 市原市

禁制
七〇六
豊臣秀吉禁制
○榊原ヨシ家蔵

上総國市原庄

八幡郷
きくま
屋ま紀
府中
以上

そう志や
村上
ごい
ご志よ

軍勢甲乙人等亂妨狼藉事
放火事
對地下人百姓非分之儀申懸事
右條々堅令停止訖若於違犯之
輩者悉可被處嚴科者也

天正十八年五月日
(秀吉印)

- 註26 註15と同じ
井上哲朗「第三節 房総の領主と城」P232『房総考古学ライブラリー8・歴史時代(2)』1994 (財)千葉県文化財センター

- 註27

市原城については、いわゆる軍記物に少し登場する。史実としては信憑性に乏しいが、一部を掲載する。「総州久留里軍記」に養老市原の城主芦野丹波守、「房総通史」に天文二十三年(1554)、忍丹波守および弟民部少輔在城、同年秋、北条氏康は大軍を率いて久留里の里見義弘軍を攻撃し、相前後して市原城も攻めた。

「房総里見軍記」「関八州古戦録」などには、丹波守の弟民部少輔が里見軍に属し、久留里籠城戦に勝利して、のちの永禄七年(1564)の第二次国府台合戦にも従軍したと記録されている。(落合忠一「日本城郭大系第6巻、千葉・神奈川」1980より)

また、「関八州古戦録」によると、天文二十三年(1554)十一月、北条氏康軍が久留里城攻略の際、里見方についた市原城の忍丹波守の舎弟丁民部少輔は、土岐弾正・正木久太郎・須田将監等とともに兵四千騎を率いて籠城戦にもちこみ、これに勝利したとある。(瀧本平八「府中日吉神社に関する覚書」『市原地方史研究第15号』1988より)

写 真 图 版

図版 1



調査地遠景 西側より



調査地遠景 南西側より



調査前の状況 南側より北側土塁を望む



調査前の状況 東側より西側土塁を望む



調査前の状況 西側土塁



調査前の状況 西側土塁頂上より北側土塁を望む



調査前の状況 土塁中央部の削除部分



調査前の状況 西側土塁の南西端部（南西側より）



西側土塁の南西側付近の調査状況



西側土塁の南西端部頂上付近の調査状況



西側土塁の東側頂部付近の状況



西側土塁の北端部分の状況



西側土塁の北側より北側土塁を望む



北側土塁の西端頂部の状況

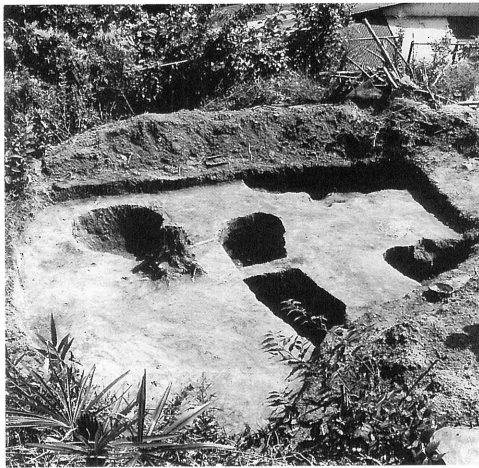


北側土塁の東端部の状況



北側土塁の東端部及び1号トレンチの状況

図版 3



1号トレンチ (北側土塁より)



2号トレンチ



4号トレンチ (北側土塁上より)



3号トレンチ



5号トレンチ



6号トレンチ



7号トレンチ



8号トレンチ



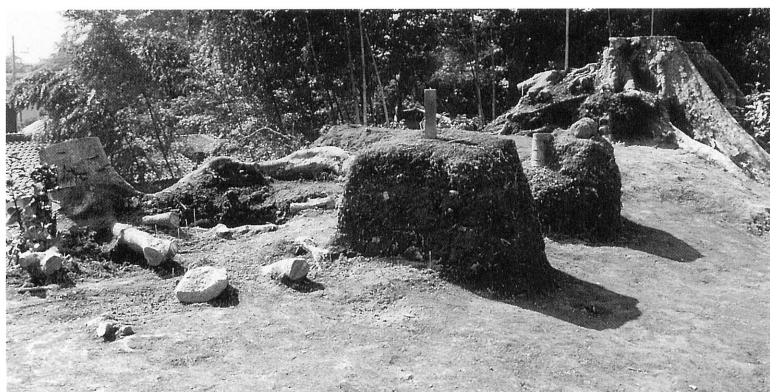
1号土壇付近の状況



1号土壇完掘状況



1号土壇人骨出土状況



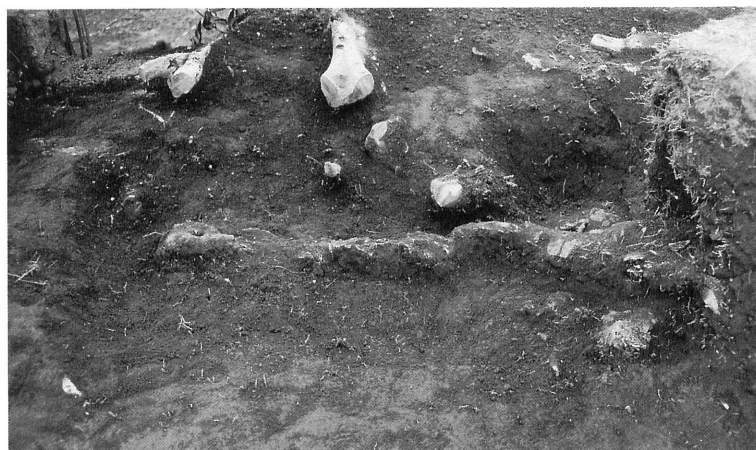
2号土壇付近の状況



2号土壇遺物出土状況



2号土壇遺物出土状況



2号土壇



2号土壇遺物出土状況

図版 5



2号土壙



2号土壙人骨出土状況



2号土壙人骨出土状況



2号土壙人骨出土状況



2号土壙人骨出土状況



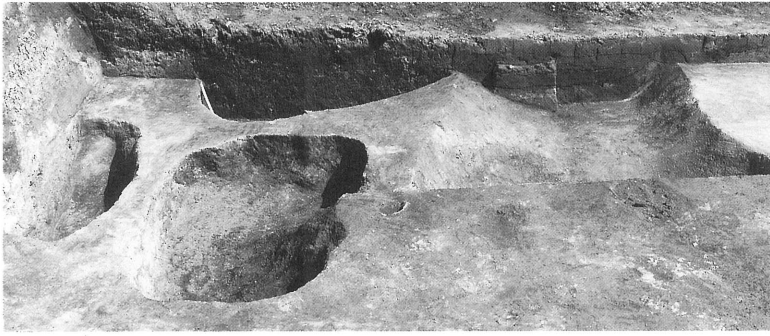
2号土壙付近調査状況



2号土壙調査状況



2号土壙



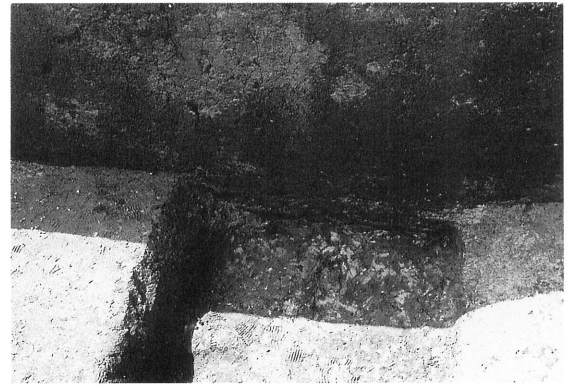
6号トレンチ内近世土坑等の検出状況



西側土塁頂部土層セクション



6号トレンチの溝状遺構



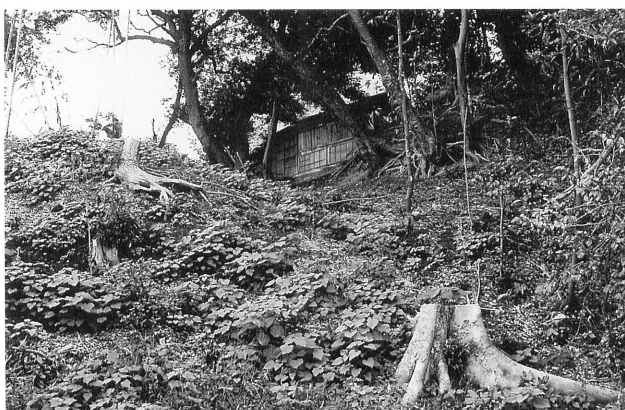
2号トレンチの溝状遺構



西側土塁の南側端部の状況



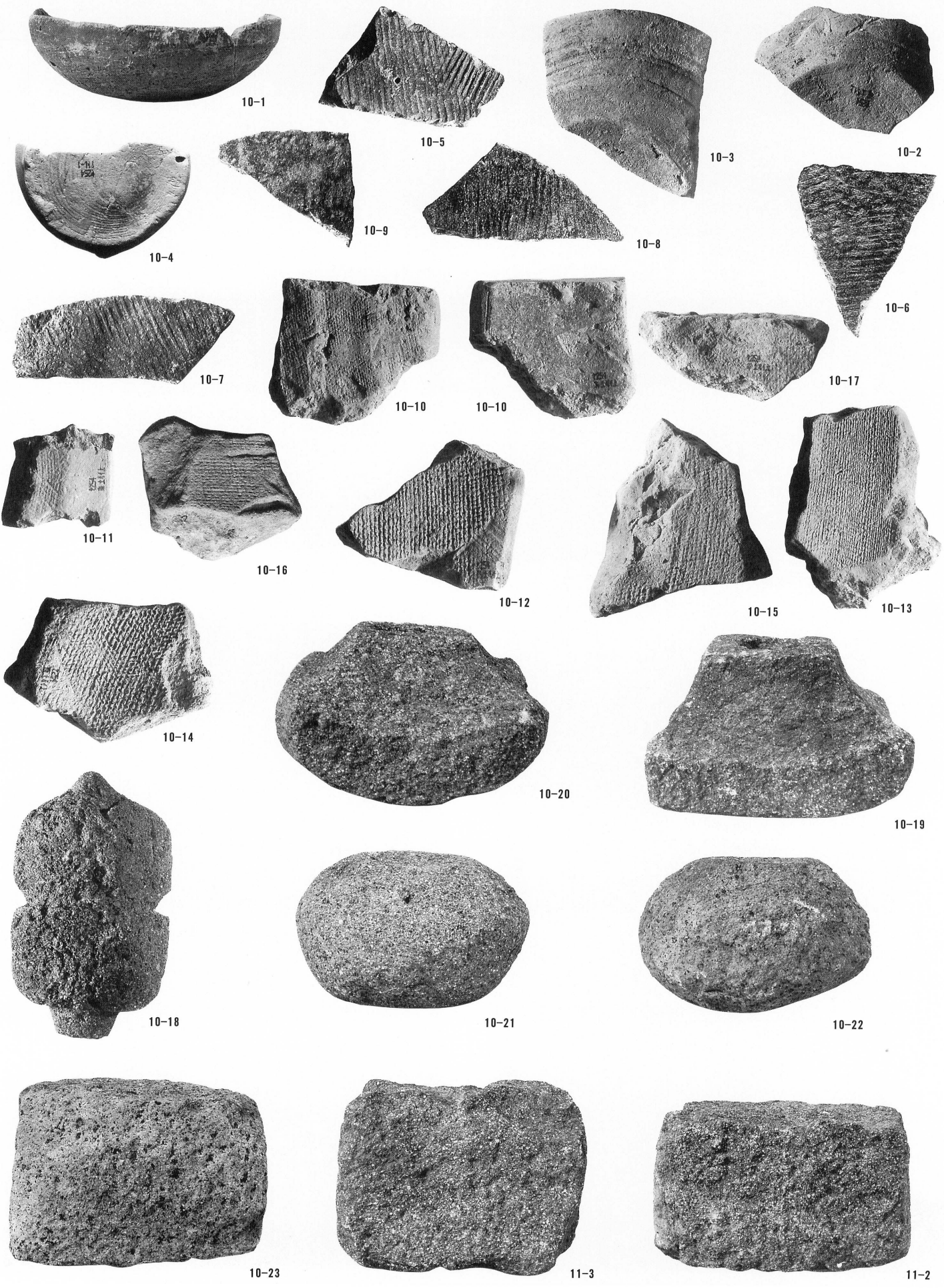
西側土塁南側掘り切り部分の状況

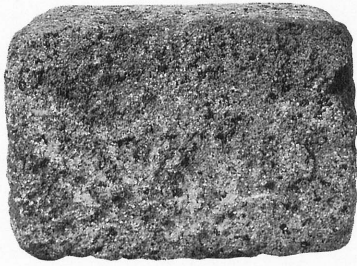


西側土塁南側掘り切り部分の状況（西側より）



左と同じ（土塁上より南側を望む）

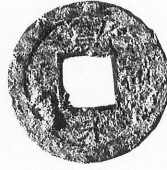




11-1



11-4



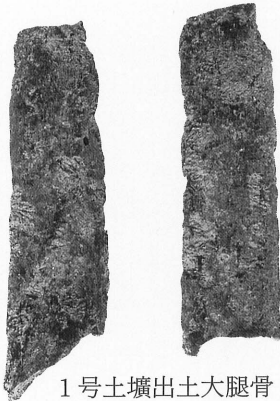
11-5



1 号土壙出土顎骨



1 号土壙出土上顎骨



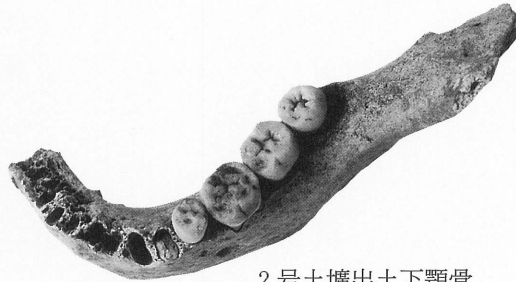
1 号土壙出土大腿骨



1 号土壙出土大腿骨



2 号土壙出土前頭骨



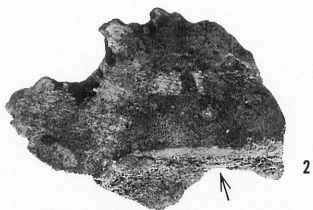
2 号土壙出土下顎骨

2 号土壙出土上顎骨

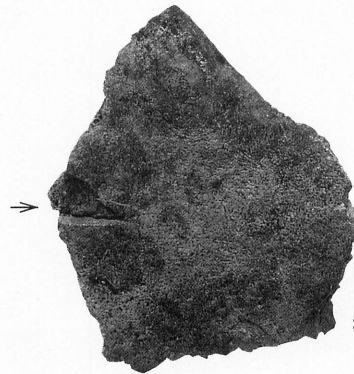
骨の中に永久歯が包まれている。



2 号土壙出土の歯



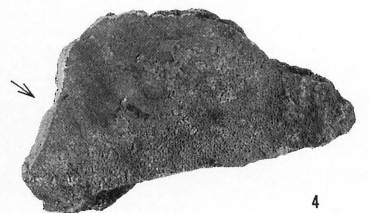
1 ~ 4 2 号土壙出土頭蓋骨片
刀の切傷と思われる痕跡



3



1



4



市原城郭跡付近の航空写真
(昭和42年頃撮影)

- | | | | | | |
|---|----------|---|--------|---|-----|
| 1 | 調査地点 | 2 | 白船城郭跡 | 3 | 光善寺 |
| 4 | 能満城郭跡主郭部 | 5 | 府中日吉神社 | | |

報告書抄録

ふりがな	いちはらし いちはらじょうかくあと							
書名	市原市 市原城郭跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	財団法人市原市文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第63集							
編著者名	田中 清美							
編集機関	財団法人市原市文化財センター							
所在地	〒290-0011 千葉県市原市能満1489番地						TEL 0436 (41) 7300	
発行年月日	1998年9月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いちはらじょうかくあと 市原 城 郭跡	千葉県市原市市原 字作ノ内95-1、95 -3、95-4	12219	28-797 セ-254	35度 31分 06秒	140度 07分 42秒	19970918) 19971003	887	土地造成 に伴う事 前調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
いちはらじょうかくあと 市原 城 郭跡	城郭跡	中近世	中世土壇 中世土塁		土師器、須恵器、布 目瓦、五輪塔、人骨 など		市原城郭跡の一端を 初めて知ることが出 来た。	

財団法人 市原市文化財センター調査報告書 第63集

市原市 市原城郭跡

平成10年9月21日 印刷

平成10年9月25日 発行

編集 財団法人 市原市文化財センター

発行 有限会社とりせん商事
財団法人 市原市文化財センター
千葉県市原市能満1489番地
TEL 0436 (41) 7300

印刷 株式会社 弘文社
千葉県市川市市川南2-7-2
TEL 047 (324) 5977